相続新聞

「感情のもつれから」

期待とは罪です。身近なものは結婚に対する期待です。結婚すると幸せになれると盲目的に信じていたことへの期待はずれは離婚率をみれば明らかです。最近の若者はそのようなことを動物的勘で察知しているのかもしれません。この「期待権」は相続争いでは最たるものになります。よく棚ぼた相続と言われる疎遠な親族からの相続は期待していないのに相続できたことからすごく得した気分になります。逆にあると思っていた遺産がなくなった場合あなたならどう感じるでしょうか?よく一度上げた生活レベルを落とせないと言います。人間は現状を通常と思い込んでしまう節があるようです。借金も借りてしまえば貸主に感謝より逃げようとします。借金は借りた人の方が貸した人より立場が強いと言われるのはこのような立場の変化によっておきるものです。この感情をうまくコントロールしないと相続は泥沼となります。一生に一度あるかないかの臨時収入に人々は平常心を失います。自分が平常心を失ってはそれこそ相手の思う壺です。今一度原点に戻って今のありがたみを感じるべきではないでしょうか。

遺言テクニック

遺言書はなんでも決められる訳ではありません。基本的には財産の処分、死後認知、後見人の指定等の法律で定められたものに限ります。しかし、財産を分割することに条件をつけることは出来ます。これを「負担付相続(遺贈)」とい言います。これはある相続人に多くの財産を与える代わりになんらかの義務を課す為の方法です。これによって特定の人の面倒をみさせることなども可能となります。しかし、あまりにも負担が大きすぎる場合やそう感じる場合は放棄することも可能ですので、生前になんらかの話し合いをしておくべきでしょう。負担を受けずに放棄すればその部分については遺言がなかったことになり通常の相続手続きつまり相続人による遺産分割の方法によることになります。そうなってしまうと折角の遺言が無意味になってしまいます。負担付相続については適切な財産と負担のバランスを考えなければなりません。

平成言事年

早いもので小渕さんが平成を片手に持ったときから20年が経ちました。平成元年に生れた子が成人になります。これから生粋の平成生まれが社会に進出します。彼らはどんな思いで成人になるのでしょうか。もはや右肩上がりの経済成長は夢物語で、希望を見つけることも難しい世の中です。これから生きることについてどうやってモチベーションを維持するのか親心で心配してしまいます。数年前は教育問題に世間はああでもないこうでもないと言っていましたが、ついにそんなことを言っている余裕もなくなっているように感じます。しかし、教育は基本です。義務教育に真実はありませんが、せめて無責任な人間を大量生産することは防がなくてはなりません。

相続クイズ

クエスチョン：故意に被相続人を殺害した場合は相続欠格となりその相続をすることができないが、殺人未遂の場合は殺していないので相続ができる?

アンサー：殺人未遂であっても故意に死亡するに至らせようとした為欠格事由に該当し相続できない。逆に故意でない傷害致死によって死亡させた場合は相続できる。答えは×

謹賀新年

新年あけましておめでとうございます。今年はねずみ年です。干支の始まりの今年は何か激動的なことが起きそうな気がします。ナイスバトンタッチできるように、精一杯やっていきます。

告知

次回「無効の向こう」お楽しみに!行政書士田島事務所